

M-EAT を用いた健康高齢者の注意機能と主観的注意経験との関連

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
河上 実樹

本研究の目的は、①認知症ではない健康高齢者の注意機能の特徴を若年者と比較することで明らかにすることと、②健康高齢者の主観的な注意経験と注意機能との関係性について検討することであった。

調査にはシルバー人材センターに登録している高齢者 50 名と若年者（大学生）50 名が参加した。高齢者は M-EAT (modify error awareness task) と日常的注意経験質問紙を実施し、若年者では M-EAT のみを実施した。M-EAT とは、画面上に表示された色名と文字の色が一致しているかどうかを判断してボタン押しをする Go/No-go 課題であり、エラー時には刺激が大きく表示され、ビーブ音なるフィードバックが行われた。

得られたデータを分析した結果、高齢者はボタン押しの速さよりも正確さに重点を置き、若年者は逆に正確さよりも速さを重視していた可能性が示された。また高齢者は若年者に比べて提示された刺激を無視するエラーが多く出現し、その多くがエラー後に起こっていることから連続してエラーを起こしてしまう可能性が示唆された。

高齢者の注意機能と主観的な注意経験との関連について有意な相関は得られなかったものの、年齢が上がるとボタン押しの反応時間は長くなるが質問紙の因子得点には差がないことが示された。ここから年齢が上がるにつれて注意機能は加齢の影響を受けるが、主観的な注意経験はほとんど変化せず、それらの間にズレが生じる可能性が示唆された。